

総合防除計画を踏まえたIPM実践指標　水稻編			
管 理 項 目	管 理 ポ イ ン ト	取り組みの ○×チェック	
		計画段階	報告時
漏水の防止	農薬の効果を安定させるとともに、水質汚濁を防止するため、あぜ塗り機やあぜシートなどを用いて畦畔の整備を行う。		
種子の選別と消毒	健全な種子を選別するため、塩水選を行う。		
	温湯消毒（6 0℃、1 0 分間）を行う。		
育苗	うすまきを心がける。中苗の播種量は、乾粃で100～120g/箱とする。		
	育苗期間の水や温度管理に注意する。		
	苗の生育状況をよく観察し、病気が発生した場合は、すぐに薬剤を使用するか、苗を処分する。		
代かき	除草剤などの農薬の効果を安定させるため、田面をできるだけ均平にする。		
田植え	健全な苗を選んで移植する。		
	栽植密度は条間30cm、株間18cmで、1 株当たり 3 ～ 4 本植えを基本とし、密植をさける。		
除草	雑草の発生源にならないよう、ほ場内外で除草に努める。		
除草及び越冬害虫対策	オモダカやクログワイ等を減らす場合は、稲刈り後早期に耕耘する。スクミリンゴガイを防除する場合は、できるだけ寒いときに耕うんする。		
病害虫に関する情報収集	県が発表する病害虫発生予察情報や講習会を通じて病害虫の発生状況や防除技術に関する情報を収集し、的確で効率的な防除の実践に努める。		
防除要否の判断	ほ場を観察しながら的確な防除手段の選択と適期防除に努める。		
いもち病対策	昨年病気にかかった稲わらや粃がらは、育苗施設のそばに放置しない。		
	田植え後、余った苗は田に放置しない。		
	稲刈り後は、年内に耕うんし、稲わらなどを十分に腐らせる。		
耕種的防除	施肥量の適正化に努め、窒素過多で病害虫の発生を助長しないよう努める。		
斑点米カメムシ対策	出穂期の発生や飛来を減らすため、出穂 2 0 日前までにあぜの除草を行う。例年発生の多いところでは、出穂期にも除草を行う。		
土着天敵・生物の観察	農薬の使用前後に、水田に生息するクモなどの天敵や害虫などの発生状況を観察する。		
農薬の使用全般	農薬を使用する際は、事前にラベルを確認し、内容を遵守する。		
	長期残効性箱粒剤など効率的な防除手段を利用し、農薬使用回数の削減に努める。		
	農薬散布時は、噴霧圧を適正にして、病害虫の発生部位を狙って散布する。		
	農薬散布は早朝の風が少ない時間帯に行い、近隣の人畜や農作物への悪影響を防止する。		
	本田防除では、粒剤など農薬飛散の少ない剤型を活用するとともに、液剤散布時は風向きや風の強さに注意し、周辺への農薬飛散を防止する。		
	農薬処理後は1 週間程度止水し、水系への流出を防 止する。		
	病害虫の農薬に対する抵抗性につかないように、特定の農薬や農薬成分を繰り返して使用しない。		
作業日誌の作成	作業内容や病害虫・雑草の発生状況を記録する。		
農薬散布履歴記帳	農薬散布を行った場合は履歴記帳を行い、成分使用回数を超過しないように注意する。		
帳簿の保管	作業日誌は概ね 3 年間保管し、次の栽培の参考に用いる。		
研修会等への参加	県や農業協同組合等が開催する栽培講習会、 I P Mや農薬安全使用に関する講習会などに、年に 1 回以上参加する。		